

保育実習生の課題を踏まえた実習指導のあり方

奥 恵・浅 香 勉・八 田 清 果・音 田 忠 男

Ideal Way of Childcare Training Guidance Based on the Issues of Early Childhood Education Students'

OKU Megumi, ASAKA Tsutomu, HATTA Sayaka, ONDA Tadao

キーワード：保育者養成、保育実習Ⅱ、保育実習Ⅲ、実習指導、実習評価

はじめに

1. 保育者養成校における学生の傾向と実習指導の取り組み

(1) 保育者養成校における学生の傾向と課題

近年、保育者養成校における重大な課題の一つとして、実習指導が挙げられる。学生の主体性や意欲、理解力や文章力の低下等によって指導に課題を抱えている養成校は多く、全国保育士養成セミナーにおいても、養成校や実習先との情報共有と対応策の検討がなされている。また、先行研究においても、保育の専門性だけでなく、学生自身の基礎的な課題について述べられている。

大日方ら (2015)¹⁾ は、学生の「社会人基礎力」が低下していることを報告している。特に、「創造力」、「発信力」、「ストレスコントロール」の低さを指摘しており、実習前に学生が自身の不安やストレスに気づき、対処法を身に付けることができるような指導をしていくことが重要だと強調している。榊原ら (2018)²⁾ は、学生自身が知識、保育経験の乏しさから、「保護者対応」の難しさ、他者との対話不足から起こる「職員との連携・協力」の難しさを感じていることを明らかにしている。さらに、「自己課題の明確化」については、ほとんどの学生が実習先に伝わっていない課題を指摘している。そのため、保育者としての専門知

識・技術の習得以外に「人としての資質」を学生時代に磨くことも大切であると主張している。このことは、学生一人ひとりに対する指導・助言と丁寧な支援が求められており、より基礎的な社会性、人間性の指導が必要になってきていると言える。

また、2019年度全国保育士養成セミナーにおいても心理的課題を抱えている学生の支援について話題があり、保護者の理解を得ることが難しいケースもあること、そのような課題を抱える学生に対し、実習先の理解を得ることが難しいことなどが共有された。学生は大人になることや働くことへの焦りを感じている。働くことイコール子どもたちを守り、教育していく責任ある立場へ移行することを意味しており、その立場が自分には務まるのかという不安に苛まれることも少なくない。自分の適性や将来像をつかめている訳ではなく、焦りや不安のある現状から楽になり漠然とした将来に淡い期待を込め、やりたいことを見つけるために保育士養成校を退学するケースがどの養成校でも多いことがフロアーの参加者との情報交換で分かった。こういった学生のフォローやミスマッチへの支援が、今後さらに必要になる。そして、養成校として学生自身に自分のことについて考える機会を提供していく必要があると示唆された。

本論の調査対象であるA短期大学の学生においても、学生の主体性、意欲、理解力や文章力の向上等が課題となっている。特に、適切な対人関係

を創る力が低いことで、適切な家族関係、友人関係を模索し教職員への相談や学生相談室を利用する学生もいる。このような学生に対して教職員が個別的支援を行いつつ、保育士課程の学修が実習に向けて進められている。つまり、学生支援は実習指導にとどまらず、広く体調管理に始まり、出欠席、科目課題への取り組み、履修上必要な提出物の期限を守ること等学修上の多くの場面で、主体的学修の姿勢を作り上げることに繋がっている。

(2) 保育者養成校における実習指導の取り組み

2019年度全国保育士養成セミナーにおいて、保育者養成校での実習指導の課題について議論され、以下の2点が指摘された。

①実習先と養成校の連携と受け入れの必要性

「養成校・施設・学生の3者協働による施設保育士養成を考える」というテーマでの分科会での議論から次のような課題と改善案が考察できる。それは、実習先と養成校の連携の必要性及び施設側の実習への能動的受け入れの転換の必要性である。社会福祉士や介護福祉士の実習にあたっては施設側の指導者も研修を受ける必要があり、実習の目的・内容等が一定になっている。しかしながら、保育士の実習に関してはそうしたものはなく、施設によって指導の在り方もばらつきがある。そうしたことから実習先施設と養成校とはより密接な連携や情報共有を行い、実習の目的や内容だけでなく、実習指導の現状、今の学生の状況等を理解しあうことも必要であることが確認された。こうした実習先と養成校との連携だけでなく、地域によっては、日誌や評価表を地域の養成校で共有するなど、養成校間での連携をしているところもある。そうした取り組みをすることで、施設側もどの養成校の学生が来て同じような指導や評価がつけられるのではないかとの指摘もあった。

②実習訪問における教員の指導の課題

次に、「保育実習における巡回訪問指導の在り方の再検討と有効な巡回訪問指導のシステムの開発」という題目での学術研究助成報告からは、実

習訪問指導についても、学生が求めている内容と実際に教員が実施している内容に差があることが指摘された。また、教員が実施している訪問指導の内容にも実習担当者とその他の科目の教員とでは差や意識の違いが見られるなどの指摘があった。これらのことから、学生のニーズを的確に把握し、それに基づいた指導が行われることが学生の満足度等にも影響を与えられられる。

(3) A短期大学における実習指導の取り組み

A短期大学における実習指導の取り組みとしては、近年、以下の5点が進められている。

①授業科目における取り組み

保育実習指導において、学生たちは一般教養科目、専門科目の学修を踏まえて精一杯実習の準備に臨んでいる。保育実習は、これらを総合的に学生自らの学びとして集結させ、実習の目的と課題設定、必要な保育技能の準備、実習指導案の作成等に取り組んでいる。その際に配慮されている点は、本論冒頭に述べられている様に、大日方ら(2015)¹⁾の指摘する「創造力」、「発信力」、「ストレスコントロール」であり、榊原ら(2018)²⁾のいう学生自身の知識、保育経験の積み重ねによる他者との対話する力である。A短期大学の授業では、これらを踏まえて多くの授業内容に即した形で、プレゼンテーション、グループワーク、ロールプレイ等を意図的、積極的に取り入れることを始めている。

②実習やボランティア体験の学びを学年間で共有することの取り組み

A短期大学では後に触れられているように、実習全体指導を2018年度から2年生と1年生との連携・共通認識を目的に行っている。両学年間の学びと気づきの共有に向けた取り組みは、2年生と1年生との連携・共通認識の涵養に貢献している。また、学園祭では、1年次の前期開講科目として2年間の学修に向けた姿勢と基礎知識を学ぶ基礎ゼミナールでのグループワークの発表、過密なカリキュラムの中で時間を工夫してのボランティア体験の発表、教育実習も含めた2年生からの

実習報告の発表プログラムを、2016年度から設定している。

③実習先との相互理解を深める取り組み

A短期大学では、実習先との相互理解について今後さらなる充実が期待される。実習報告会への参加、就職委員会との連携の下での就職講演会とも併せて、A短期大学と実習先との連携は、今後の活性化が期待される。

④進路指導と主体性・意欲の涵養に関する取り組み

実習指導において、特に1年生からの進路指導は、実習指導における主体性・意欲の涵養にとっても重要である。短い学修期間しかない短期大学において、卒業後の進路に向き合うことは、実習指導の重要な内容をなすともいえる。A短期大学では学生一人ひとりに対して、就職担当教員が配置され、週4回の朝の打ち合わせによる教職員間の情報共有等を踏まえて多くの相談が、教職員の下に寄せられている。自らの学修の姿勢に自信を持つことを目指し進路決定をより具体的に確認する過程に教職員は関わっている。

⑤実習に向けたボランティア活動、サークル活動の取り組み

ボランティア活動やサークル活動について、自ら取り組む学生は学修に対しても意欲的である。保育技能やスポーツ活動を展開するサークル、選択科目である地域社会とボランティアを履修する学生、福祉施設や地域の児童館等において、子どもたちや利用者の方々、地域住民の姿を理解する貴重な機会、良好な対人関係の形成過程等に向き合う場面等を頂いている。

目的

本研究では、2018年度の保育実習Ⅱ及び保育実習Ⅲの実習先（保育所・施設）の評価を項目ごとに分析し、A短期大学での最後の実習を終えた2年生の傾向を明らかにする。そして、他の保育士養成校の実習指導に関する取り組みを踏まえた上で、A短期大学の学生にあった今後の保育者養成のあり方を考察する。

方法

A短期大学の2018年度の保育実習Ⅱと保育実習Ⅲの実習評価の平均値を算出し、各評価項目から客観的に評価の傾向を明らかにすることで、学生の傾向と実習指導の課題を考察する。また、他の保育士養成校の実習指導に関する研究を踏まえ、A短期大学の保育者養成として今後取り組んでいく実習指導のあり方を検討する。

研究倫理への配慮としては、実習配属園情報や個人情報の実名や特定できる表現は避け、研究倫理に配慮する。実習配属園情報や個人情報の取り扱い、研究データの保管等に十分に気を付け保管する。本研究に関わって収集した資料・データ等の管理に万全を期すとともに、研究遂行上、施設・園が特定されることのないよう十分配慮するとともに知り得た個人情報を他に漏らさないようにする。また、学校法人小池学園研究倫理公正委員会の審査・承認を受け実施した。

結果と考察

1. 保育実習Ⅱの評価平均の傾向

(1) 全体の傾向

①保育実習Ⅱの総合評価平均値の結果

2018年度に保育実習Ⅱを履修した学生の実習先での総合評価を分析した。分析にあたっては、実習先評価をA = 5、B = 4、C = 3、D = 2、E = 1、辞退等 = 0と置き換え算出した。なお、今回の辞退者に関しては全員、実習前辞退者であったため平均値を算出する際の人数から除外し分析を行った。

前回の研究（「保育士養成校における保育実習配属先の傾向と実習指導のあり方について」³⁾）では2016年度、2017年度の評価平均は共に近い数字となった。また、C評価に該当する値となった。辞退者に関しては、2016年度の場合、実習中辞退者が3名に対して、2017年度の場合は4名とも実習前辞退であった。実習中の辞退者が出

なかったことを考えると2017年度の評価平均の方が高い値になったことが示された。なお、2017年度においても実習前辞退者は人数から除外し、分析を行っている。(表1)

その上で、2018年度の総合評価平均値の結果をみると評価平均が3.30となり、2017年度の総合評価平均値に比べ約0.04ポイント低い結果となった。なお、2018年度の保育実習Ⅱを行った学生は33名であり、2016年度、2017年度の人数に比べ、実数で約12名減少している。(表2) 2018年度の実習前辞退者は3名であった。

表1：【2016年度、2017年度の保育実習Ⅱの総合評価平均値】

種別	2016年度		2017年度	
	人数	評価平均	人数	評価平均
保育所	47	3.36	46	3.34

出典：音田忠男・浅香勉・八田清果・奥恵(2019)

表2：【2018年度保育実習Ⅱの総合評価平均値】

種別	人数	評価平均
保育所	33	3.30

②保育実習Ⅱの項目別評価平均値の結果

2018年度保育実習Ⅱにおいて、実習を行った

学生の実習先での評価を項目別に分析した。分析にあたっては、実習先評価をA=5、B=4、C=3、D=2、E=1、辞退等=0と置き換え算出した。なお、今回の辞退者に関しては全員、実習前辞退であったため平均値を算出する人数から除外し分析を行った。また、評価表の項目に評価がついていない箇所に関してはその部分を除外し分析を行った。その結果を、図1に示した。

図1の通り、項目別にみると、「自己課題の明確化」、「協調性」(3.92)が最も評価平均値が高く、次いで「子どもへの対応」(3.89)が高い平均値であった。また、評価平均値が低い項目としては、「保護者とのかわり」(2.90)、「地域社会との連携」(2.96)となった。この2項目については、実習中に該当する活動が行われなかった、実習園の判断で行わないといったケースもあるため全ての評価表に必ずしも評価がついているとは限らず、空欄になっているものも少数ではあるが存在した(平均値を算出する際、空欄のものは除外し分析を行った)。

③保育実習Ⅱの総合評価平均値と項目別評価平均値の結果からの考察

総合評価平均値を見ると2016年度は3.36、2017年度が3.34、2018年度が3.30となった。実

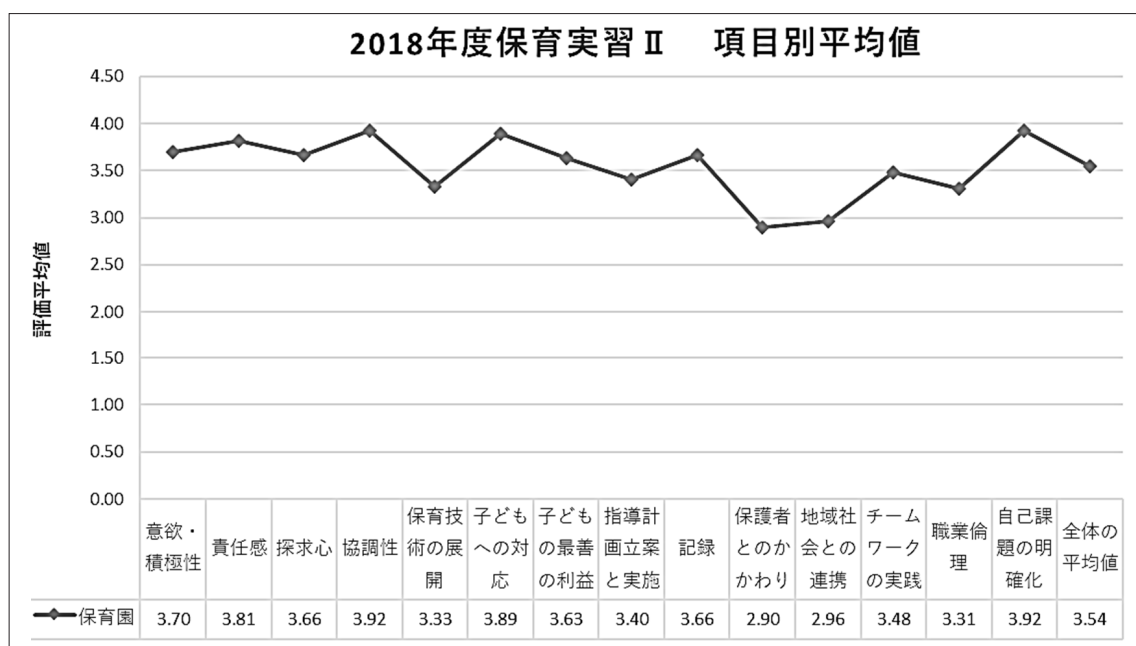


図1：【2018年度保育実習Ⅱ 項目別平均値】

表3：【「態度」「知識・技能」で見る保育実習Ⅱの項目別評価平均値】

態度 (3.77)				知識・技能 (3.44)									
意欲・積極性	責任感	探求心	協調性	保育技術の展開	子どもへの対応	子どもの最善の利益	指導計画立案と実施	記録	保護者とのかかわり	地域社会との連携	チームワークの実践	職業倫理	自己課題の明確化
3.70	3.81	3.66	3.92	3.33	3.89	3.63	3.40	3.66	2.90	2.96	3.48	3.31	3.92

習評価で言えば「C」評価にあたる数字である。併せて保育実習Ⅱの参加人数を見ると2016年が47名、2017年度が46名、2018年度が33名と年々減少している。本来であれば人数が減少すれば、平均値は多少なりとも上昇すると考えるが、2018年度の平均値に関しては過去3年間で最も低い値となった。これは実習での評価が全体的に下がっていることを意味する。そこで2018年度の項目別評価平均値に着目し、その結果について分析を行った。項目を個別で見ると「自己課題の明確化」、「協調性」(3.92)、「子どもへの対応」(3.89)と実習評価では「B」に近い評価を得ている。「自己課題の明確化」に関して、A短期大学の学生は実習に臨むにあたり自己課題を意識している学生が多いと言える。このことは「保育実習指導Ⅱ」の授業の中で課題の重要性を教員が何度も繰り返し伝えてきたことも影響していると推測する。

また、「協調性」や「子どもへの対応」の評価については、学生一人ひとりが実習先の子どもや教職員に対し、対象や状況に応じて意識的に関わりを持っていたこと、そのことを実習先の保育士が感じていたと言える。

次に「態度」「知識・技能」で保育実習Ⅱの項目別評価を考察する。表3が示すように、「態度」には「意欲・積極性」、「責任感」、「探求心」、「協調性」の4項目が含まれる。「知識・技能」には「保育技術の展開」、「子どもへの対応」、「子どもの最善の利益」、「指導計画立案と実施」、「記録」、「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」、「チームワークの実践」、「職業倫理」、「自己課題の明確化」の10項目が含まれる。「態度」全体でみる評価平均は3.77、「知識・技能」全体でみる評価平均は3.44であった。この「態度」と「知

識・技能」の評価平均の結果について、学生の実習に臨む態度は実習先から見ても良好な学生が多いと言える。一方で、「知識・技能」の評価平均の結果については、項目ごとにばらつきがあった。その中で、評価平均が低い項目は「保護者とのかかわり」(2.90)、「地域社会との連携」(2.96)、「職業倫理」(3.31)、「保育技術の展開」(3.33)であった。

「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」に関しては、実習中に地域との連携に該当する内容が行われないケースやまだ保育者ではない実習生に保護者と関わることに消極的な実習生もあり、評価項目が空欄の場合もある。こういった各実習園の事情もあり、この2項目について評価されている学生の評価表を個別で見ても「C」(点数で表すと「3」)が非常に多く目立つ。またこの2項目は、保育士として現場で働いてから学びが深まる項目であるとも考えられ、実習生の評価も「C」が多くなるのではないだろうか。

「職業倫理」に関しても引き続き授業等で時間を割き、学生の理解を深めていくことも大切と考えるが、「職業倫理」の項目を実習先の保育士がどのような観点で評価を行うのか、そこが明確とされていないため各実習先で評価にばらつきが生じていると考えられる。「保育技術の展開」に関しては、学生自身の現場での経験が少ないといったことも低評価の要因の一つと考えられる。

2. 保育実習Ⅲの評価平均の傾向

(1) 全体の傾向

実習先評価を項目別に分析した。分析にあたっては、実習先評価をA=5、B=4、C=3、D=2、E=1、辞退等=0と置き換え、算出した。その結果が、図2のグラフである。な

お、本研究において、施設種別については、以下のように分類した。

- ①養護系：養護施設・乳児院
- ②障害児系：児童発達支援センター、医療型障害児入所施設
- ③障害者（通所）：就労継続B型、障害福祉サービス事業所
- ④障害者（入所）：障害者支援施設

図2の通り、項目別にみると、「利用者とのかわり」（3.94）が最も評価平均値が高く、次いで「1日の流れ」（3.91）が高い平均値であった。なお、A短期大学の評価項目とは異なる施設独自の項目で評価された2名については、今回の調査分析からは除外した。

音田忠男・浅香勉・八田清果・奥恵（2019）³⁾において、2016年度と2017年度の保育実習Ⅲ実習先種別ごとの評価平均（総合評価）を比較したが、ここでは、施設種別ごとに比較すると、保育実習Ⅰ（施設）と同様に、養護系施設は比較的评价が低く、障害者（通所）施設は評価が高い傾向

がみられていた（表4を参照）。しかし、表5：【実習先種別ごとの総合評価平均値】を見てもわかるように、2018年度は、養護系が最も評価平均値が高く、障害者（通所）系の評価平均値が最も低くなっており、前年度までとは異なる傾向にあることがわかる。さらに、表4と表5を比較した場合、総合評価の平均値は2016年度が4.02、2017年度が3.77、2018年度が3.56となっており、徐々に低くなっている傾向がみられる。その要因の一つとして考えられるのは、保育実習Ⅲを選択する学生の増加である。本当に「施設に行きたい」「施設で学びたい」という強い意欲のある学

表4：【2016年度、2017年度の保育実習Ⅲ実習先種別ごとの総合評価平均値】

施設種別	2016年度		2017年度	
	人数	評価平均	人数	評価平均
① 養護系（養護・乳児）	6	3.6	10	3.42
② 障害児（通所）	3	4	4	3.50
③ 障害児（入所）	2	3.5	0	—
④ 障害者（通所）	1	5	2	4.50
⑤ 障害者（入所）	8	4	9	3.67
人数合計／評価平均	20	4.02	25	3.77

出典：音田忠男・浅香勉・八田清果・奥恵（2019）

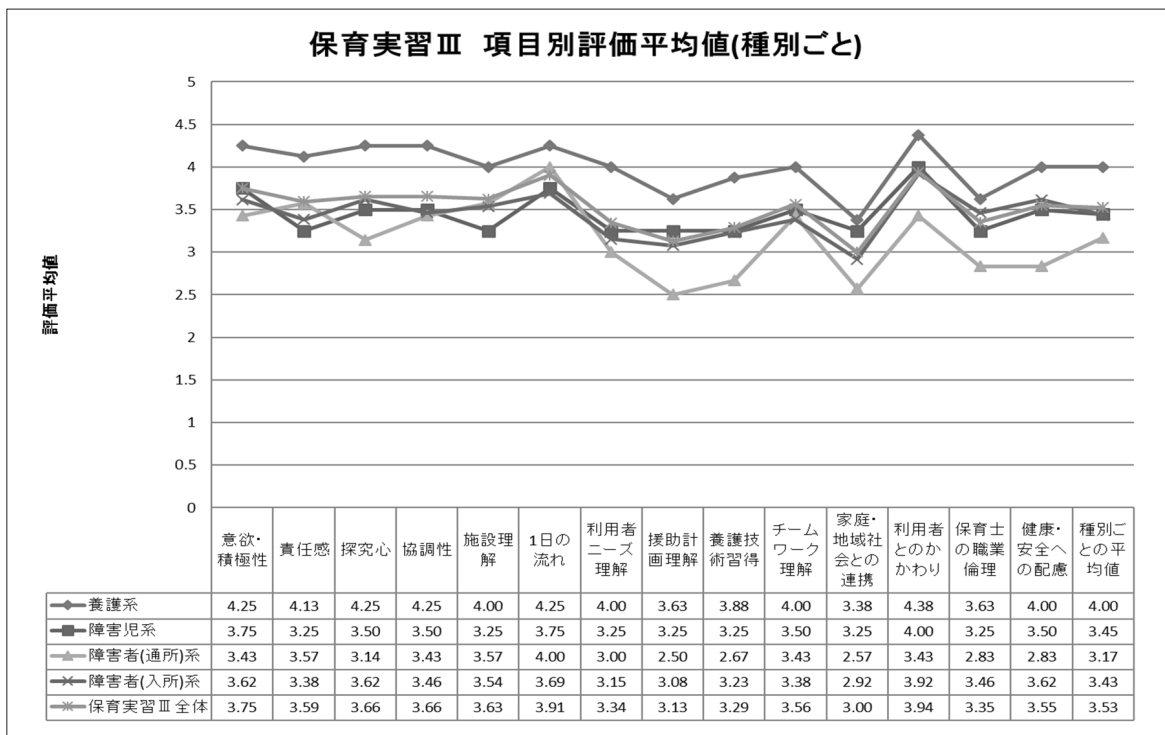


図2：【保育実習Ⅲ 項目別評価平均値】

表5：【2018年度保育実習Ⅲ実習先種別ごとの総合評価
平均値】

種別	人数	総合評価
養護系	8	4.00
障害児系	4	3.50
障害者（通所）系	7	3.14
障害者（入所）系	13	3.62
人数合計／評価平均	32	3.56

生以外の学生の割合が増えたのではないかと推察できる。さらに、傾向の要因及びA短期大学の学生の傾向を探るため、評価項目別の分析を行った。

（2）実習先種別ごとの傾向

図2から以下のような傾向がわかった。実習先種別と項目との関係性を見ていくと、障害者（通所）系以外は、「利用者とのかかわり」の項目において最も高い平均値を示した。また、同様に、障害者（通所）系以外は、「家庭・地域社会の連携」の項目において最も低い平均値を示していた。このように、他の種別と比較した時、障害者（通所）系以外は傾向が異なっていた。「援助計画の理解」、「家庭・地域社会との連携」はどの種別においても平均値が低い傾向が見られる。これは、援助計画の立案を実習では行わないところや実習生には家庭等と連携場面に入れていない実習先も多く見られ、その項目において実習では行われなかったといった理由で低い評価がつけられていることも要因であると考えられる。

種別ごとにみた項目の平均値は、養護系が最も高く（4.00）、最も低いのは障害者（通所）系の3.17であった。障害者（入所）系は、唯一、各項目の平均値で4.00台がなかった。この差の背景には配属された学生の特性や意欲の違いも評価に大きく影響があると考えられる。

音田忠男・浅香勉・八田清果・奥恵（2019）³⁾の「まとめ（考察）」では、以下のような記述がある。

「自ら選択したⅢのほうがⅠより評価がいい傾向がある。求められるレベルは上がっている

はずなのに、この結果であるということは、学生自らが選択することがモチベーションの向上に役立っているのかもしれない。（平成29年度までは消極的選択というより積極的選択が多いように思う。消極的選択でⅢを選んだ場合は評価がどう違うのか。平成30年度の傾向は違うことも予想される。）」（音田忠男・浅香勉・八田清果・奥恵2019：p84）³⁾

積極的に保育実習Ⅲを選択した学生が多いと、モチベーションも上がり、評価も高くなるとするならば、2018年度は、「保育所で責任実習がしたくないから」「指導案が書けないから」等の理由から消極的選択により保育実習Ⅲを選択した学生が多い傾向だと考えられる。その結果が、前年度までとは異なる評価傾向となって表れたのではないかと推察できる。

また、配属した学生の特性と言った側面から見ると養護系に配属された学生は、総じて学習面でも生活態度でもしっかりしていると思われる場合が多く、前年度までと同様にモチベーション高く実習が行えたのではないと思われる。しかしながら、今回調査対象とした年度（2018年度）は、消極的選択により保育実習Ⅲにした学生も多かった。そうした学生の多くは、学習面や生活態度、意欲の面でも課題を抱えていた。その結果、このような学生は、養護系施設には配属できず、また、宿泊を伴う実習も難しいと判断し、障害者（通所）系に多く配属をした傾向があった。その為、障害者（通所）系の評価も低くなったとも考えられる。

3. 実習指導の課題の改善案について

（1）自己課題の認識によって動機付けを高める 取り組み

原子（2013）⁴⁾は、学生が保育実習Ⅱに向けて感じている不安を調査した結果、「指導案、研究保育」が多く、「自己課題、目標」が少なかったため、それぞれの実習で反省は行っているが「自己課題の認識」がなされていないことの問題を指

摘している。そして、事後指導で評価のズレがあった項目や所見による評価の根拠、励まし等を実習生に行くことによって、「自己課題の認識」が明確化され、保育実習Ⅱに向けた内発的動機付けが高まったと報告している。つまり、学生の自己評価や次の実習に向けた不安を把握し、実習評価とのズレを確認した上で事後指導をすることは、今後の実習に対する意欲につながると考えられる。前述の結果から、本学では自己課題の明確化ができていない学生が多いようだったが、反省や課題が具体的になることで意欲や自信を無くさないように気を付け、肯定的に捉えて向上心を持てるような振り返りの指導が必要だと考えられる。そのためには、授業内で取り組んだ実習を振り返るプリントやスライドの内容を、個別に事後指導の面談を行う実習訪問担当教員と共有していくことが必要ではないだろうか。また、実習報告書は実習訪問担当教員が確認するが、授業内で科目担当教員が配布する振り返りプリントと重複する内容も多い為、各実習で用いている内容や書式を踏まえた統合化も検討していきたい。そのことによって、より内容の充実した実習報告書となり、次の実習で配属となった学生にとっても貴重な資料となるだろう。

(2) 学年間や保育者からの学びによって意識や意欲を高める取り組み

長谷 (2016)⁵⁾ は、学力や目的意識、モチベーションの低い学生等がいる現状を踏まえ、保育者としての目標や理想像を「なわてジェンヌ」と名付けて学生に提示し、3つの柱①幅広い教養、②豊かな保育技術、③確かなマナーが身に付くように「ステージアップセミナー」を授業に準ずる形で実施している。また、友川 (2019)⁶⁾ は保育実習指導Ⅰにおける施設実習の事前指導として、同一実習先での実習経験をした2年生から1年生への指導効果を明らかにしている。2年生から実習に関する態度、知識や技能、実習時間以外の宿泊生活や通勤、休日の過ごし方等に関する指導を受けた1年生の9割が、実習に対する不安の軽減、

意欲や前向きな気持ち、実習内容の理解に参考になったというコメントをしている。実習後の調査結果では、身だしなみ・清潔、事前学習や事前の準備物、利用児童(者)との関係の取り方の有用性が示され、実習前後で評価の変化も見られたと報告している。A短期大学でも、実習体験全体報告会や学園祭でのプログラム等、学年間で学びを共有する機会を重視している。これらは、2年生からの指導効果のみならず、1・2年生共に発信力や質問力等の社会人基礎力を高め、意欲の向上につながっていると感じられる。今後は、全員が他者に伝えることを意識した学びの振り返りができるよう報告書やスライド作成の指導を行い、多くの学生が伝え合う経験ができるように検討していきたい。さらに、実習指導と就職支援の連携を意識し、学生自身が保育者として成長していく見通しが持てるような内容を伝えていく必要がある。例えば、実習報告会に卒業生や保育者を招いて経験談や助言を語ってもらうことや、2年生が1年次に感じていた実習不安から今までの成長を踏まえた後輩へのアドバイスを発表に加える等である。

おわりに

1. 保育実習Ⅱにおける今後の課題

本学の保育実習Ⅱにおける実習生としての学ぶ態度は、実習先から見ても良好な学生が多いと言える。これには実習中のみならず、日々の学生生活における学生の態度や振る舞いなども大きく影響していると考えられる。現在、教員も学生自身が日々生活を丁寧過ごすことができるよう、授業だけではなく日々の生活態度にも気を配り、声掛けや指導等にあたっているが、今後はこれまでに以上にそのことについて意識をし、より個々に応じた指導を行っていく必要がある。

また、「知識・技能」に関する評価項目については保育実習指導Ⅱの授業だけではなく、各授業での学びを深めていくことの重要性が示唆された。中でも「職業倫理」、「保育技術の展開」の評価平均については関連科目で学生に伝わりやすい

形で授業を展開する工夫も必要となってくる。特に「保育技術の展開」に関しては、保育技能Ⅰ・Ⅱといった科目を筆頭に保育技能を学生に伝えている。しかし、そのことを学生が現場で活かしていきれていない実情もあり、それが結果に表れていると考えることができる。また、2年間という短い学生生活の中で多くの科目を受講する学生にとって、実習以外の現場経験が不足していることも否めない。保育現場との接点が不足していることによって、折角養成校の授業で培っている保育技術や技能を保育現場でチャレンジする機会が少ない。そういった学生たちに対して、ボランティアなどを有効的に活用し、その際保育技術や技能にチャレンジする場面や機会を得るチャンスを意図的に増やすことも必要である。

「保護者とのかかわり」、「地域社会との連携」そして前項でも触れた「職業倫理」もそうであるが、実習先の保育士がどのような観点で評価を行うのか曖昧な部分もある。そこが明確にされていないため、各実習先で評価にばらつきが生じていると考えられる。養成校側で、それぞれの項目に関して観点を示し、実習先に評価を依頼するといった試みも必要だと考える。

2. 保育実習Ⅲにおける今後の課題

保育実習Ⅲの実習先評価の項目別傾向からは、実習先種別による差異が見られたことが第一の特徴としてあげられる。その背景には、学生の実習に向けた意欲が大きく影響しているのではないかと考えられる。これに関しては、今年度だけの特性なのか、1年分からはわからない。来年度以降も傾向を分析していく必要がある。

「利用者とのかかわり」に関しては、どの種別でも高い数値を示していたが、これは、学生自身が目の前の利用者に一生懸命、誠実に向き合った結果であると考えられる。そして、そこには技術ではなく、気持ちや人に向き合う姿勢といった対人援助職として持つべき資質の基本が評価されたのだと考えられる。施設側が何を実習生に求めているのか。それは保育や介護の技術ではなく、人に向

き合う姿勢ではないか。そういった意味で言えば、A短期大学生は、対人援助職の基本的姿勢を身に着けられているといってもいいのではないだろうか。

保育実習Ⅱの方でも指摘されているが、評価の観点が実習先にゆだねられてしまっているという課題がある。「地域社会との連携」「援助計画の理解」は、どの種別でも平均値が低い傾向が見られた。これは、先にも指摘したが、実習先が「実習でやっていないので」等の理由で低くつけているからではないかと推察されるが、はっきりとそうであると書かれているわけではない。保育実習Ⅱでも指摘されているが、実習先の評価のばらつきを減らすためにも、養成校側でそれぞれの項目に関して観点を示すことも必要であると考えられる。

3. 実習指導の今後のあり方

今後、学修意欲や基礎学力に課題のある学生の現状を養成校と実習先とが共通認識し、共に保育者を育てていく協力体制がより一層重要となる。そして、学内外の経験が達成感と自信を育む結果となるように積み重ねていくことが、学生の積極性と意欲の向上に繋がると考えられる。

具体的な実習指導の課題は、①一人ひとりに見合った学び方ができるような自己目標シートや日誌の様式の検討、②学生が自分の課題や成長を見つめ直すことや、他者に伝えることの意義を持って取り組める実習報告書や振り返りプリントの検討、③科目担当教員と訪問担当教員間での訪問指導や事後指導の共通認識と情報共有、④実習先と実習指導の現状、学生の状況、評価の観点等を共有し理解を深めるための、実習通信や意見交換会等の活用、⑤学生のキャリア形成と社会人基礎力を高めることを意識した学年間や卒業生、保育者との学び合いの機会の設定である。そして、これらの実習指導の取り組みの効果を研究していくことも今後の課題としていきたい。

引用文献

- 1) 大日方重利、藤重育子「保育専攻学生の社会人基礎力と施設保育実習後の自己評価の関連」、『環境と経営：静岡産業大学論集』、21、静岡産業大学、2015.1、17-26.
- 2) 榊原尉津子、小川真由子、杉山佳菜子「保育実習の振り返りと自己評価（2）—現場で求められる保育者の資質能力向上を考える—」、『鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要』、1、鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部、2018.3、171-183.
- 3) 音田忠男、浅香勉、八田清果、奥恵「保育士養成校における保育実習配属先の傾向と実習指導のあり方について」、『小池学園研究紀要』、17、小池学園、2019.3、p.84.
- 4) 原子はるみ「保育実習における学生の内発的動機付けに関する研究 —実習園評価と自己評価の比較分析 I—」、『学校教育学会誌』、18、北海道教育大学函館学校教育学会、2013.3、67-76.
- 5) 長谷秀揮「保育実習Ⅱの「振り返り」と「課題」についての一考察」、『四條畷学園短期大学紀要』、49、四條畷学園短期大学保育学科、2016.5、9-18.
- 6) 友川礼「保育実習の事前指導におけるメンターを活用した教授法の有用性に関する研究—施設実習への不安低減及び実習中に有益な事前指導の内容に注目して—」、『松山東雲短期大学紀要』、50、松山東雲短期大学、2019.3、47-59.

奥 恵 (埼玉東萌短期大学専任講師)
浅香 勉 (埼玉東萌短期大学教授)
八田清果 (埼玉東萌短期大学准教授)
音田忠男 (埼玉東萌短期大学専任講師)